

結婚の神様

櫛木理宇

第二回

5 (承前)

夕ゆうべの部の披露宴は午後四時から開宴であった。

奇くしくも新婦は咲希さきと同じく、

「この青扇せいおうでん殿で式を挙げるのが子供の頃から夢だった」

のだという。新郎及び両家両親の希望と提案を丸無視するかたちで、新婦とプランナーにより強行突破された式と披露宴——というのが、蔵野くらしの経由で仕入れたらしい百合香ゆりかの情報であった。

幸か不幸か式は親族のみの出席で、咲希たちは披露宴から参席である。

「今回は、両家両親と親類は全員本物よ」

百合香が咲希の耳へ口を寄せてささやく。

「ただし新郎新婦の友人は全員サクラらしいわ。あの司会を除いては」

「司会？」

咲希は目をすがめた。

視線の先には演台でスポットを浴びている、上品なスーツ姿の女性が在った。

結婚披露宴の司会といえば、むろんプロを頼むのが一般的だ。だがこの不景気の折、費用の面も考えて友人にお願いするカップルも少なくないという。

台本があつてマニュアルさえしつかりしていれば、素人の司会でも何ら問題はない。むしろ内輪で盛りあがつて和氣藹々とやれると、わきあいあい昨今のウエディング情報雑誌ではとみに推奨されているようだった。

咲希の個人的な見解としては「素人よりプロが無難」であつたが、もちろん他人様ひとさまの祝事へ異を挟む気はない——これが、普通に招かれた披露宴ならばだ。

「大丈夫なの」

つい眉をひそめてしまう咲希に、

「太鼓判を押すとまでは言えないけど、司会の経験は何度かある人みたいよ。その証拠にほら、場慣れして堂々としたもんじやない。」

進行も滞りないし、これならプロ顔負けでしょ」

と百合香は言った。

「まあ、そうね」

咲希は首肯した。

百合香の言うとおりに、彼女の司会進行はいたってそつがなかった。普段から人前でしゃべる職種にでも就いているのか、滑舌がよくアドリブもきいて、玄人はだしの仕切りぶりである。

むしろその後ろで忙しなく動きまわっている、スタッフらしき女性のほうがよほどアマチュアくさいかもしれない。やけに目立つ赤いフレームの眼鏡をかけ、宴がはじまっているというのに、まだウェイター相手にくどくどと指示をつづけている。

「——たいへんお待たせいたしました。これよりキャンドルサービスがはじまります。新郎新婦が皆様のテーブルへご挨拶にうかがいますので、どうぞあたたかい拍手でお迎えくださいませ」

司会に促されたとおりに、会場に拍手が起こる。

ふと咲希の目が、最後部の扉が細くひらくのをとらえた。

照明を落とされた薄暗い会場へ、小柄な影が腰をかがめながら入ってくる。新郎友人側の席へとすべりこむように着く。

遅刻かしら、と咲希は思った。

しかし席に着いたその影は、よくよく見れば女性であった。

新婦と同様、新郎側の友人も全員サクラのはずだ。一人だけ女性をまぎれこませるなんて変なの——と目を凝らすと、同じテーブルの男性たちもはつきりと戸惑い顔をしているのが見てとれた。

キャンドルサービスはすではじまっていた。

ピアノバージョンの『美女と野獣』が流れる中、新郎新婦が進むにつれてスポットライトも動いていく。

咲希は笑顔の二人に体を向けながら、視線だけをさきほどの女に据えていた。三十歳前後だろうか。上下黒のツーピースという地味を通り越して陰気な装いが、パーティドレスというより喪服じみて映る。

二人で一本のトーチを携えた新郎新婦が、キャンドルを灯した新郎側主賓のテーブルから離れた。

つづいて新婦側主賓席、新郎側友人席へ——と歩みかけたところで、新郎の顔が目に見えて引き攣った。蒼白になり、立ちすくむ。あきらかに、くだんの女性を目にとめたせいだった。

対照的に新婦は、彼女を見るなり顔を真っ赤に紅潮させた。眉と目が吊りあがり、唇がへの字に曲がる。その双眸ははつきりと、ツーピースの女性を仇のごとく睨みつけていた。

新婦が新郎を小声で叱咤するのがわかった。彼女はトーチごとぐいと彼の腕を引き、新郎友人テーブルのキャンドルを無視して咲希

たちのもとへやって来た。だがその手は、音をたてんばかりにわなないていた。

司会の女性が、なにこともなかったように進行していく。

「ではこれよりお待ちかねの、メインキャンドルへの点火です。皆様、御注目ください。さあ新郎新婦による、ブライダルキャンドル

点火——……」

高砂たかさこへ戻った新婦は、高みから見おろすように顎をあげて例の女性を睨みつけていた。

顔には笑みのかけらもなかった。唇がめくれ、歯が剥むき出されていく。新郎はといえば、新婦と彼女を見比べておろおろするばかりだ。

「あのひと、誰なのかしら」

低くつぶやいた咲希に、百合香が答える。

「蔵野さんの情報が確かなら、たぶん新郎の先妻さんだと思うわ」

「先妻さん？　じゃあ男性のほうは初婚じゃないのね」

「そう。この結婚って、いわゆる不倫の果ての略奪婚らしいのよ。おまけに新婦は先妻さんの高校の後輩だったとか。不倫略奪のいきさつは、彼らが生まれ育った田舎町ネットワークにたちまち広まっちゃったみたい。そのせいで新郎も新婦も地元の友人全員に総スカンを食らって、招待状を送ったはいいけど返信すらもらえなかった

って話よ」

「それほど反感をかうってことは、よっぽどひどいやりくちで略奪したの？」

咲希が問う。

百合香は眉をちよつと上げて、

「蔵野さんによれば、先妻さんは『糟糠そうこうの妻』ってやつだったらしいわ。新郎は転職に失敗してからずっとヒモ同然で、去年資格試験に受かって就職するまで、何年も先妻さんの稼ぎだけで食べていたそうなの。おまけに新郎の母親はひどい嫁いびりババアだったそうでね、そうとう苦労させられてきたみたいよ。なのに就職が決まった途端、彼は奥さんに感謝するどころか、さつさと新しい女に走ったってわけ」

ひどい話だ。咲希は顔をしかめた。

「その状況でよく披露宴なんて挙げようとするわね。信じられない」

「まあそこは、新婦のドリームが勝ったんじゃないの」

百合香が笑った。

「お姫さまみたいなドレス着て主役になれる、一生に一度か二度あるかないかのチャンスだもんね。でもその気持ち、あたしなんかより咲希にこそわかるんじゃない？ 式や披露宴に懸ける気持ち、あんたは人一倍あるんでしょう？」

「うん。それはまあ……否定しないけど」

咲希は渋々うなずいた。

——でもわたしなら、こんなのはいやだな。

ひっそり心中でつぶやく。

わたしならやっぱり、もっと周囲に祝福される結婚でありたい。

親にも友達にも手ばなしで祝ってもらいたい。どんなに好きな相手だろうと——ううん、だからこそ、略奪なんかじゃなく正攻法で射止めたい。

そう慨嘆がいたんしたとき、視界の端で、黒留袖の初老の女性が立ちあがった。

咲希の目が思わず吸い寄せられる。新郎の親族席から友人席まで、初老の女性が裾すそを乱して駆け寄っていく。

動線の先には、黒のツーピースの女性がいた。

「あんたって女は！」

罵声ののしりが空気を裂いた。

着いていた席といでたちからして、おそらく新郎の実母だろう。前妻らしき女に詰め寄り、食ってかかっている。

「どこまで輝てるちゃん幸せを邪魔する気なの。恥を知りなさい、恥を！」

同テーブルのサクラ男たちは、狼狽ろうばいして顔を見合わせるばかりだ。

止める様子もない。式場のスタッフもまた、手を出していいものか決めかねている様子だった。慌てて割って入ったのは、どうやら新郎父らしき紋付袴もんつきはかまの男性であった。

新婦は相変わらず鬼の形相ぎようそうで、新郎はおたついている。

披露宴の進行は完全に止まっていた。夫に羽交はがい締めしりめにされて止められている新郎母を後目に、ツーピースの女が席を立つ。

司会の女性が演台を離れ、彼女にマイクを渡した。

なんのためらいもなく女はマイクを構え、

「輝矢てるやさん、愛理あいりさん、このたびはご結婚おめでとうございます」と、なめらかに挨拶あいさつをした。

「本日はお招きくださり、まことにありがとうございました。わたくし、ただいまご紹介あずかに与りました、新郎の輝矢さんの先妻でございます。輝矢さんとは以前同じ会社に勤めておりまして、同期で新入社員研修の際、同じグループに配属されたことがきっかけで親しくお付き合いさせていただくようになりました。そして二年の交際を経て五年前に結婚し、三箇月前に離婚いたしました」

「ちょっと、あんた！」新婦が叫んだ。

「あんたって女は！」新郎母が絶叫した。

しかし女同士三つどもえに見えた争いに、そこで新たな参戦者が現れた。

高砂のテーブルまで大急ぎで駆けつけた燕尾服えんびふくの中年男——新婦の父親であった。

彼は新郎の胸倉を掴み、つばを飛ばしてわめいた。

「おい、どういふことだ！ きみは離婚歴があつたのか！ そんな話は聞いていないぞ！ うちの娘の経歴に、泥を塗つてくれたのか！」

どうやら父親は、百合香の言う田舎町ネットワークには属していなかったらしい。

すでに全身から生気を失つた新郎は、がくがくと揺さぶられるがままであつた。

はるか後方の新婦親族席では、新婦母らしき女が両手で顔を覆おおつて泣きくずれていた。

黒留袖の新郎母が、夫に羽交い締めめにされたまま顔をゆがめて叫ぶ。

「よくも大事な披露宴めっちゃくちやを滅茶苦茶めいよきそんにしてくれて！ 名誉棄損めいよきそんで訴えるからね！」

先妻はマイクを持ったまま無表情に、

「どうぞ！」

と応えた。

「どうせ親族以外のお客は、みんなサクラらしいじゃないですか。

それに名譽もなにも、本物の関係者なら全員がとつくに正しい事情を知っています。だからこそ誰も、招待状に返信しなかったんでしよう」

新郎母は卒倒寸前で、いまにも泡を吹かんばかりだった。

先妻が高砂へ向きなおった。

「愛理さん。ギャンブル依存症で借金だらけ、おまけに風俗狂いの不良債権をわざわざ略奪してくださって、どうもありがとう。嫁いびりが趣味の姑しゅうとめと、二世帯住宅とは名ばかりのボロ家が洩れなく付いてまいります、せいぜい頑張ってくださいませ。陰ながら応援しております。——学生の頃からやたらライブル視されてるとは思ってたけど、まさかここまでやってくれるとはね」

にっこりと笑み、会釈する。

新婦が言語にならないわめき声をあげたとき、ようやく会場の外から駆けつけたスタッフ十数人が諍いさかいの間に入った。

司会の女性が演台をおり、先妻の背中をうながすように押す。先妻はうなずいて、顔をあげると颯爽さつそうと歩きだした。

去っていく二人の女性の背へ、

「司会のギャラは払わないからね！」

と新婦が叫ぶ。

司会はそれを黙殺し、先妻だけが肩越しに振りかえって応えた。

「言っておきますが、訴えてくださったってかまいませんよ。受けて立って、不倫と嫁いびりによる精神的かつ肉体的暴力の慰謝料と相殺そうさいして差しあげます。では追ってこちらの弁護士から連絡させますので、楽しみにお待ちください」

あとには呆然ぼうぜんと立ちすくむ人びとだけが残された。

会場ではいまだ、『美女と野獣』のピアノバージョンが高らかに流れていた。

6

完全に收拾がつかなくなった会場をあとにし、咲希は『青扇殿』近くのカフェで、ぐったりとテーブルに突っ伏していた。

「……このバイトって、いつもこんな修羅場ばかりなの……」

「いやあ、今日は格別に濃かったわ」

と百合香は笑って、

「お夕飯、食べはぐれちゃったね。あたし『本日の Pasta セット』頼むけど、咲希はどうする？」

とメニューを向けてきた。力なく咲希は手を振った。

「いらない。食欲ない……」

「繊細せんさいなこと」

「だつてさあ、せっかく憧れの青扇殿に来れたのに……。そりゃー〇〇パーセント幸福な花嫁姿を見れると期待してたわけじゃないけど、いくらなんでも幻滅すぎる……」

半べその咲希を後目に、百合香は手をあげてウエイトレスを呼び、デザートとコーヒー付きのパスタセットを頼んだ。咲希はミルクテイーだけを注文した。

「だから言ったでしょ、結婚に夢見すぎないほうがいいって」

おしぼりで指を丁寧に拭きながら百合香が言う。

「結婚ってのはべつに人生のゴールじゃないのよ。どんなに素敵な式と披露宴を挙げたって、そのあとの結婚生活は悲惨の一途って例はいくらでもあるんだから。知ってる？ グーグルで『夫』と検索すると、検索候補が『夫 死んでほしい』、『夫 熟年離婚』、『夫 保険金』と物騒ぶつそうなワードで埋まるってこと」

「ああ……。聞いたことあるかも」

咲希はうなずいた。

「でもみんながみんなそうじゃないでしょう。実数としては結婚生活に満足してる人のほうが多いんじゃないの。ただどぎつい例のほ
うが、どうしても目立っちゃうっていうだけで」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

パスタセットのサラダとスープがいち早く運ばれてきた。百合香

がフォークを手にとって、

「確かなのは現代日本の婚姻率は低下する一方で、かつ少子化の一途をたどってるってことだけかしらね。えーと二〇一〇年の統計では、男性の三人に一人、女性の五人に一人が生涯未婚者だってデータが出てたような」

「ご、五人に一人……」

咲希は肩を落とした。

「つまり二〇パーセントもいるってことじゃない。怖い、統計怖い」「そんな青くなるほどのことじゃないでしょ。その全員が「結婚できなかった」女とは限らないもの。選択の上で「結婚しない」女だって、きっと相当数いたんだからさ」

フォークに刺したパプリカとレタスが、見る間に百合香の口の中へ消えていく。

つづいてミルクティーのポットが目の前に置かれたが、咲希はティーコゼをはずす気力さえ湧かなかった。

百合香の前へは、湯気のたつボンゴレロツソが置かれた。

「ちなみに日本男性の家事参加率、育児参加率は世界最低レベル。家事分担率が二割を切るのは先進国の中では日本だけだってさ。おまけに政府はいまだに在宅介護を推奨して、福祉にお金をかける気なしときてる。つまりこの国じゃ、女は結婚したら家事育児介護を

背負わされるのが当然の流れなのよ。その上、外へ働きに出て稼いでこない専業主婦は『寄生虫』呼ばわりでしょう。つくづく女が結婚に夢を持てる時代じゃないわよねえ」

ボンゴレをもりもり食べながら百合香は言った。

「ところで咲希ん家の両親って、うまくいつてるほう？」

「あ、うん。たぶん」

咲希は首肯した。

父はあの年代にありがちな仕事人間の堅物かたぶつだが、母と不仲だと感じたことはない。とくに声を荒らげての夫婦喧嘩など、一度も見たことはなかった。

百合香がかすかに苦笑する。

「いいことね。わたしの親は離婚こそしてないけど、もう二十年近く家庭内別居中」

「あ……そうなんだ。ごめん」

思わず謝った咲希に、

「べつに咲希が済まながることないよ」

百合香はかぶりを振った。

「うちの場合は借金どうこうで揉めて不仲になった夫婦なの、父がぼんぼん育ちで、お金の流れに疎うとくてさ。でももしお金が喰うなるほどあったとしても、うまくいかないところはうまくいかないのよね。」

友達の家なんて地位も名誉も財産もある名家同士の結婚だったけど、結局は夫の度重なる浮気で泥沼離婚しちゃったもん」

「そ、そうなんだ……」

咲希はあいまいに相槌あいづちを打った。ほかにんと言っていていいかわからなかった。

百合香はフオークで器用にスパゲティを巻きとりながら、

「とにかく咲希みたいな子は、いまのうち結婚の現実も見ておいたほうがいいって。このバイトなんて、まさに格好のサンプルが見られる絶好の機会だから——そうね、最低一年はやってみたらいいんじゃない？」

と微笑んだ。

帰宅すると、自宅の門柱にはすでに灯りがともっていた。

陽はまだ落ちきっていないものの、上空では夏の近さを予感させる澄んだ紺いろが、夕焼けの茜あかねとまだらに溶けあっている。

いまだ幻滅気分を引きずる咲希が門扉もんびに手をかけたとき、

「おう、帰ったのか」

「シロちゃあん！」

背後からの声に、咲希は首がねじ切れる勢いで振りかえった。

門柱で足踏みしている史郎しろうはTシャツにジャージ、ジョギング用

のスニーカーというスタイルだ。肩で息をしている。どうやら日課の走り込みに出ていたらしい。

「シロちゃんもいま帰ったところ？　すごいね、偶然だね」

「おう」

「う、運命を感じるよね」

決死の思いで言った台詞だった。だが史郎はそれをきれいにスルーして、咲希を頭の天辺からつま先まで眺めた。

「すごい格好してんな。どこ行ってたんだ」

「あの——あ、えっとね、バイト」

「バイト？」

史郎が怪訝な顔で問いかえす。しかし深くは尋ねまいと彼は瞬時に判断したらしい。「ちょっと待ってる」とだけ言い、庭の飛び石を蹴って自宅に駆けこんでいく。

戻ってきた彼が手にしていたのは、先日咲希が貸した『ヤングマガジン』であった。

「これ返す。ありがとうな」

「ど、どういたしました。ねえシロちゃん、新連載のヤンキーバトル漫画読んだ？　すごかったね、まさか初回でクラスメイトの半分以上が死ぬなんてね」

「いきなり飛ばしてるよな。でもおれは最近、巻末の『実践合気道

講座』がためになって面白いと思う」

「あ、それまだ今週読んでない！　ありがと、思い出させてくれて」

「いや、じゃあな」

まだ話していたいという咲希の思いを知ってか知らずか、史郎は肩越しに手を振って小走りに自宅へ入っていく。

その背中をたつぷり数分見守ってから、咲希は『ヤングマガジン』を胸に抱きしめ、鼻歌まじりに自宅の門扉を押した。

消沈していた気持ちは、嘘のように浮き立っていた。

入浴を済ませた咲希は、自室の布団に寝転がって『テツ・オオムラの実践合気道講座』をめくりながら、今日史郎と交わした会話を思い返していた。なにしろ短い会話であったから、何度も何度も反芻はんそうした。

史郎とはむろん幼馴染おきななじみの間柄だ。そこへ加えて昔はチームメイトでもあった。小学生時代、二人とも男女混合のバレエチームに所属していたのである。

中学の部活は、当然ながら男子と女子は別々だった。

咲希は男子バレエ部のマネージャーになる予定であった。そのつもりで顧問に届も提出した。三年間、史郎のそばに付きつきりで過ごすプランを脳内で完璧に立てていた。

だが結局はバレーチームのOGである先輩に拉致^{らち}られ、彼女は女子バレー部に入部させられてしまった。

高校時代も以下同文だ。また咲希もやったらやったで熱くなってしまう性格のため、ついつい六年間みっちり部活に青春をつぎこむ羽目になった。

だが身長がいまひとつ伸びなかったこともあり、咲希は競技としてのバレーを高校でやめた。

一方、史郎は大学でもバレーをつづけた。スパイカーとしては全国でも十指に入ると言われ、一時は全日本入りもささやかれたほどだ。しかし大学三年の夏に肩を壊したのを機に、彼は潔いほど淡々とプロ入りを断念した。

「バレー以外でもやりたいことはあるから、大丈夫だ」

なにごとともなかったような顔で彼はそう言った。そして就活に意識を切り替えるやいなや、現在勤めている光学機械メーカーの内定をもらった。

強い人なんだよねえ——。

雑誌を胸に伏せて、咲希はまぶたをおろした。

そう、史郎は強い。いつも前を向いていて、まっすぐだ。そしてちよつぱり他人に無頓着^{むとんちやく}なところはあれど、十二分にやさしい人だ。

——そばにいて支えてあげたいけど、わたしの出番なんてなかなか

かないんだよねえ。

なにしろああいう人だから、と心の中でぼやく。

いつだって史郎は強くてやさしくて、かつ飄々ひょうひょうとしている。

もしや咲希の気持ちに気づいているのでは、とあやしんだことも何度かあるのだが、そのたび煙けむに巻かれてきた。とはいえ史郎がはぐらかすような態度を見せるわけではない。とにかく素で、掴みどころがない男なのである。

——でもそこがまた素敵なんだけど。

つぶやいて、咲希はあくびをひとつ洩らした。

駄目だ、今日はもう寝よう。

とにかく波乱万丈な日だった。いや波乱ばかりだったと言うべきか。『実践合気道講座』のつづきは、また明日読むとしよう。

「おやすみ、シロちゃん……」

枕もとのスタンドを消した。

一分と経たぬうち、咲希は吸いこまれるように深い眠りへと落ちていった。

第二章

1

「次のお仕事は来週土曜日、『ベルパレス・ラファエル』で昼の部ね。式は十一時からで披露宴は正午から。一時間前には会場入りしといてちょうだい」

と蔵野からメールが入ったのは、木曜の午後であった。

咲希は言われたとおり午前十時には着くべく、服もメイクも完璧にととのえて九時半に自室を出た。

今日は「なるべく華やかに」という注文付きであったため、胸もとにたつぷりとレース付のドレープをあしらったゴールドベージュのドレスを選んだ。

バスに乗るのがちょっと恥ずかしいが、周囲だつてきつと祝事だと察してくれるだろう。ラメが入った同じくゴールドのポンプスに足を押しこんで、颯爽と玄関戸を開ける。

「おう、お出かけか」

「シロちゃん！」

思わず咲希は叫んだ。

家の真ん前の道路に、ジーンズとビーチサンダル履きの史郎が立っていた。コンビニ帰りなのか、片手に弁当と缶ビール入りのビニール袋を提げている。

「シ、シロちゃんはいま帰ったところ？ 偶然だね、運命を感じるね」
「なんだかデジャヴだわと思いつつ咲希が口走る。

しかし史郎はやはりその台詞には取りあわず、

「また例のバイトか。そんな派手な服で行っていいもんなのか、そのバイトは」

「あ、えっと、うん」

咲希は返事に迷った。しかし咄嗟とっきにうまい嘘は思いつかなかった。

「……じつは、ブライダルスタッフのバイトなの」

と真実を最大限ぼかして答える。

「あのね、ブライダル関係ってけっこう時給がいいのよ。この歳にしては貯金がちょっと心もとないから、短期間だけでもと思ってはじめてみたの。き、きれいな服も着られるし、ごはんも出るし一石二鳥かなって」

手を振りながら、なるべく早口でまくしたてた。隙を与えて詳細な突っこみを入れられては困る。「あなたとの結婚資金を貯めるためです」などと、まさか本人の前で言えるはずもない。

「そうか」

史郎が無表情にうなづく。

咲希は激しく首を縦に振った。

「そう、そうなの。だからこれから式場までね、バスで——」

「ちよつと待ってる」

「え？」

言い置いて、史郎がコンビニニ袋を揺らし今居家の中へ消えていく。これまたデジャヴだわ、と咲希は思った。

しかし数秒後に戻ってきた史郎は、今日は漫画雑誌ではなく車のキイを携えていた。

「式場まで送ってやるよ、乗れ」

車庫のカラーラアクシオを顎で指され、咲希は「えっ」と大きくのけぞった。

「で、でもシロちゃん、そんな、悪いから」

「そんな格好でバスに乗られたんじゃ、爺さん婆さんたちの心臓にこそ悪いだろ。気にするな、どうせ朝めしを食いに本町の吉野屋まで行く予定だった」

でもシロちゃん、さっきコンビニでお弁当買ってきてたよね——と喉まで出かけた言葉を、咲希は慌てて呑みくだした。

——やっぱりシロちゃんってやさしい。

彼の好意、いや厚意を無下にはできない。それに彼の愛車の助手

席に乗る貴重なチャンスを、本音を言えば逃したくない。

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて」

咲希はもじもじとアクシオの助手席ドアへ手を伸ばした。しかし指さきがドアに触れるか触れないかのうちに、

「あ、そっちは荷物が山積みなんで後ろに座ってくれ」

とあつさり言われてしまった。咲希が固まっている間にも史郎は恬淡てんたんと運転席へ乗り込み、

「それで、式場ってのはどこなんだ？」

「駅裏のベルパレスです……」

助手席の夢が、夢が——と歯噛みしつつ後部座席から弱々しく答える咲希をよそに、アクシオは車庫からなめらかに滑り出した。

ベルパレス・ラファエルでの挙式は、予定どおり十一時からはじまるようだった。

百合香とは会館のロビーで顔を合わせた。しかし開口一番、

「今日はあかし、向こうの御式に出るから」

と告げられた。

百合香が指さした先には会場の案内板が立っていた。同じく昼の部で、別会場にておこなわれる式や披露宴が手書きの墨字で示されている。

咲希は「そうなんだ」といったん首肯しかけ、板の文字を思わず二度見した。

今日咲希がサクラとして出席するのは『千堂・新山御両家様』の式と披露宴のはずだ。しかし百合香が指している板には『新山・千堂御両家様』と記されている。

偶然だろうか。いやしかし両家とも、こちらの地方にさほど多い姓ではないし——と咲希が戸惑っていると、百合香がわけ知り顔で肩を叩いてきた。

「こっち見て」

「え？ ——うわ」

十件表示できる液晶表示の案内板は、もつとわかりやすかった。いや、わかりやすいのだが、同時にひどくわかりにくかった。

まず一番上には『千堂・新山御両家様 御婚礼。会場…二階チャペル』とある。そのすぐ下には『新山・千堂御両家様 御婚礼。会場…一階ガーデンフロア』。どちらの挙式も同時刻だ。さらにその下には『千堂・新山御両家様 披露宴。会場…三階ロイヤルホール』。そして『新山・千堂御両家様 披露宴。会場…三階ブリリアントホール』とつづく。

「……なんだか、新山と千堂がゲシュタルト崩壊しそうなんだけど」

みけん 眉間を指で押さえて咲希は言った。

「なにこれ、どういうことなの」

「話せば長いことながら」

百合香が謡うように、

「あるところに千堂という夫婦がおりました。その友人夫婦に、新山という同い年の夫婦もおりました。ある日のことです。千堂さん家の旦那さんと、新山さん家の奥さんが不倫しているのが発覚しました。ただちに両家に離婚話が持ちあがりましたが、なんと調停中に、新山家の旦那さんと千堂家の奥さんも、同じく男女の関係ができてしまいました。しかたがないので両家は離婚し、再婚禁止期間明けを待って、それぞれの相手と挙式することになりましたとき」

「はあ？」

咲希は目を剥いた。

「意味がわからない。なんでそんなことになるの。いや百歩譲ってそれぞれの相手と再婚するのはいいとして、なんで同じ日の同じ時刻に式と披露宴をする必要が」

「要するに、いまだにお互い張り合ってるのよ」

百合香が苦笑する。

「ほんとに幸せなら過去の相手のことなんか気にならないでしょうにね。でもこの二組はどちらもそうじゃない。お互いへの当てつけというか鞘当さやあてというか、なんがなんでも『自分たちのほうが

上!』『あんたらより幸せ!』ってマウンティングし合っていないと気が済まないらしいわ。双方の新婦があえて旧姓に戻さず、前の婚姻時のままの姓でこうして表示させるっていうのも意地を感じるわよね」

「馬鹿馬鹿しい……」

嘆息した咲希に、百合香が深くうなづく。

「そう、馬鹿馬鹿しいし、呆れちゃう。だからこそいきさつを知っている親族や友人たちは、みんな巻きこまれたくなくて出席を断ったってわけ。そこで、あたしたちサクラスタッフの出演よ」

「ああなるほど」

「ちなみに今日の式に参加する本物は、千堂家元奥さんの御両親と、新山家旦那さんの父上だけみたい。こちらは離婚調停のため情報交換しあっているうちに結ばれちゃった側だから、自分たちはあくまで被害者だという意識が強いよね。ただし新山家旦那の母上は『こんなみつともない再婚、大反対。式なんて恥の上塗り』と、出席を断固拒否し通したとか」

母上さまに半分賛成かな、と咲希は思った。

配偶者に裏切られた上、しかも相手が友人夫妻の片割れとなれば激怒する気持ちはわかる。そして残された片割れと慰めあっているうち、恋に落ちるケースだっつてないとは言えない。

とはいえ「同時刻同会場の挙式」とまで張り合いつづける心境は理解しがたい。たとえ向こうが対抗してきたとしても、笑ってさりとかわせばいいのに、と言いたくなってしまふ。

——でも、どうなんだろう。

いざその立場に立たされたら、果たして「自分だけはそんなふうにならない」と言い切れるだろうか。

一生を誓った相手に裏切られる辛さを、わたしはまだ知らない。できることなら知りたくないけれど、もしそうになったら冷静な判断力を保っていられる自信は——正直言えばとほ乏しい。

——恋愛と結婚は違うっていうのは、こういう意味もあるんだらうな。

ただの彼氏に裏切られるのと、配偶者に裏切られるのでは重さが違う。後者はただの恋愛ではなく、生活そのものだからだ。さらに離婚となれば、人生設計の基盤からして崩れてしまう。思い描いていた未来図も老後の青写真も台無しである。そのショックと恨みたるや、未婚の咲希には想像もつかない。

考えこんでしまった咲希に、

「じゃああたし、そろそろ行くね。そっちもがんばって」

と百合香が手を振って去っていく。

エレベータへ歩いていく彼女の細い足首を見るともなしに眺め、

咲希は深く息を吐いた。

結婚前の事情はともかくとして、『千堂・新山御両家様』の式と披露宴は滞りなく終わった。

はじめてのガーデンウェディングに多少不安はあったが、風の涼しい曇天どんてんだったのがさいわいした。フラワーシャワーを終えてすぐ、会場内へ案内されたのもありがたかった。

披露宴の進行もごく常識的であった。お色直しは一度きりで、キヤンドルサービスやムービーなどは省略された。

咲希の出番は、友人代表として原稿棒読みのスピーチをしたのみに終わった。残る時間はきれいなドレスを眺めながら、野菜のテリーヌしたつみだの牛フライ肉だのに舌鼓したつみを打っているだけでよかった。

最後に新郎新婦と両家の親に見送られて会場をあとにしたときは、「ようやくまともな披露宴に出席できた」

と満足感を覚えたほどだ。

ロビーにおいてスマートフォンを確認する。百合香からメールが届いていた。

「終わった？ こっちはもうちよつとかかりそう。よかったら会場を出てすぐのファミレスで待っていて」

いいタイミングである。お上品なフレンチのコースだけでは、咲

希にはいまひとつ物足りなかったところだ。

咲希は了解メールを返送し、ファミレスの禁煙席に着くやいなやメニューを広げた。

百合香が現れたのはおよそ二十分後であった。

「はー、つっかれたあ」

と肩を回しながら咲希の正面へ腰をおろすと、

「なに食べてるの、え、担々麺？ たんたんめん いいわね。でもあたしは飲み足りないから、生ビール頼もうつと」と呼び出しボタンを押す。

訪れた店員に「ナマチュー生中と、フライドポテト一つ」と注文する百合香に、咲希は箸を休めて言った。

「よく飲むねえ」

「そっちこそよく食べるわね。フレンチのコースのあと、ためらわずに担々麺の大盛り食べる女ってそういないよ」

と百合香が笑う。

咲希はスープに浮いた芝麻醬チーマージャンと胡麻ペーストごまを箸先でかるく混ぜて、

「で、どうだった？ そっちの披露宴は」

「思ったよりまともだったわよ。友人の余興の代わりに新郎本人がギターの弾き語りを三曲披露したのと、新婦が『花嫁の手紙』で新郎の名前を前の旦那と二回間違えたのと、ブーケプルズで当たった

サクラの子に、『もっと嬉しそうな顔しろよ』って新婦が小声で悪態をついたこと以外は」

「ああ、うん……それはよかった」

咲希はひかえめに相槌を打った。

到着した生ビールのジョッキを百合香がぐつと呷^{あお}って、

「でもほんと、意外に大過なく終わった感じ。いま三時ちよつと過ぎだから、時間もまあ常識的だしね。結婚前のいきさつがどうあれ、割れ鍋に閉じ蓋で意外とうまくいきそうなカップルだったわ」

「うん。わたしが参加したほうもとくに問題なくて、長続きしそうなカップルだったよ。お姑さんは結婚自体に反対らしいけど、話を聞く限り、前のお嫁さんより相性いいんじゃないかなあ」

「いつもこんなにスムーズだといんだけどね」

フライドポテトの皿が運ばれてきた。お好きに食べて、のジェスチャーをしながら、百合香が一本つまんで口へ運ぶ。

「それより、咲希のほうはどうなのよ。例の『この世に存在する』とだけは確か』な彼氏と、ちよつとは進展してるの？」

遠慮なくポテトをいただこうとしていた咲希の眉が、てきめん 観面に曇る。

「え、あー、うーん」

言葉を濁してから、

「じつは今日ここに来るときに、車で送ってもらった」

「いいじゃない」

「うん。でも助手席に乗せてもらえなくて、後ろに乗れって言われた」

「ああ……」

百合香は呻くような声をあげかけてから、

「まあ、そういうこともあるわよ」

と急いで付けくわえた。

咲希がやさぐれた表情で、

「だよね、助手席は荷物で一杯だからって言われたし、実際に仕事道具だの傘だの着替えだのが山積みだったの。よくあることだよね。滅多に人を乗せない人とか、そういう事態になりがちよね。うん、だからべつに全然気にしてなんかいないんだけどさ」

と食べ終えた丼を脇へどけ、首にかけていた紙ナプキンを自棄やけ気味にむしり取る。

「わかったわかった」

百合香が制止した。

「じゃあ今日の一件はひとまず置いときましょう。そのほかはどうなのよ、なにかこう、甘い雰囲気になるようなシチュエーションはなかったの」

「甘い……そうね、ここ最近は……ヤンマガ返してもらって、代わ

りにヤンジャン貸してもらったかな」

「ヤンマガって」

百合香がビールを噴きだしかけ、テーブルを叩いた。

「ごめん。うんうん聞いてようかと思っただけどやっぱり駄目だわ、駄目すぎる。あんた彼氏とちよつとでも色っぽい空気になりたいんでしょ？ ならせめて、恋愛ものの少女漫画くらい読んでおきなさいよ。ヤンキー漫画だのバトル漫画だのを間に挟んで、どうやってロマンスが発展するっていうのよ」

「だってシロちゃん、そんなの読まないし」

シロちゃんが読まないなら話題のネタにもなんないし——とさらにやさぐれる咲希に、百合香が眉間を押さえて言った。

「よし、じゃああんただけでも先に、恋愛エピソードを二次元で勉強しときなさい。ちよつどいいのを持つてるから。貸してあげるから」

とコーチのトートバッグを探り、取り出した数冊のコミックスを咲希に押しつける。

「え、なに？ これ借りちゃっていいの？」

咲希は目を白黒させた。

「いいわよ、どうせ読み終わったとこだし。リアリテイある漫画とは言えないけど、すくなくとも脳内は恋愛モードになるからおすす

め。ちやつちやと読んどきなさいな」

百合香は言いはなち、中ジョツキを豪快に傾けた。

2

八月に入ったばかりの『青扇殿』は、耳を聳もたするほどの蝉しぐれに包まれていた。

電光案内板のほとんども『一之瀬・森内御両家様』の文字で占めたその式と披露宴は、規模といい招待客の人数といい、盛大の一言であった。

「なんかいつもと雰囲気違わない？」

咲希は声をひそめ、かたわらの相棒を肘ひじでつついた。

百合香が彼女を横目で見て、

「そりやそうよ。今日の新郎は一之瀬英いちのせすくゑの次男坊だもん」

「一之瀬英——って、あの県会議員の？」

「そう。だから新郎の兄は同じく議員の一之瀬守まもね。新郎自身は政治畑と関係ないただの会社員らしいけど、父も兄も出席する披露宴となれば、しがらみがあって大々的にやらないわけにいかないみた

しよ」

「はあ……」

どうりで貫録ある、いかにもお偉いさん然としたおじいさま——いや、おじさまが多いわけだ。招待客の平均年齢が、常より二十は高い。

会場の入り口もウェルカムベアやボードなどといったファンシ—なグッズは見あたらず、全体にかつちりと古めかしくまとまっている。

一番しんどいのは、開宴前から会場がもうもうたる煙草の煙で満ちていることだ。このぶんだと終わる頃には、髪も服もたっぷり脂やにくさくなっているだろう。

更衣室で即着替えさせてもらって、ドレスは帰宅途中にクリーニングに出さなきゃ——と咲希は辟易へきえきした。

「あ、そういえば蔵野さんから、『新婦友人として精一杯華やかに、ゴージャスに、ファビュラスに装って来て！』ってメールが入ってたわ。つまりそれって政治家のおじさまたち向けに、って意味？」

「八割がた、そういう意味」

百合香が首肯した。

「今日のあたしたちは人数合わせアンド見栄要員みえってところかしら。いえね、当初の新郎新婦の希望では、親しい友人たちだけ招待した内々のパーティで済ませたかったらしいのよ。でもそれを聞きつけた父親の一之瀬英が、『おれの息子に、そんなみすばらしい真似をさ

せられるか!』と激怒しちゃったようなので、『金は全部出してやる。おれが式も披露宴も仕切ってるから、おまえはおとなしく従ってろ!』と宣言して、今日のこの場に至る——という次第」

「なんて勝手な」

咲希は呆れた。

「長男のほうは同じく議員だから体面どころもわかるけど、政治に関係ない次男坊の結婚式なら、本人たちの好きにさせてあげればいいのに」

「と、一般人のあたしらは思うわよね。でも一之瀬英本人も二代目の世襲議員だし、面倒くさい諸々もろもろがつきまとうのが当たり前になってるんじゃない」

「そうかもしれないけど……新郎新婦はやっぱり可哀想だわ」

会場には続々と来賓が集まりつつあった。

新婦側を咲希たちのようなサクラで水増ししたというのに、それでも新郎側の招待客が圧倒的に多い。

本物の新婦友人とおぼしき女性たちは、隣のテーブルでちいさくなって座っていた。咲希たちとすら、ほとんど目を合わせようとしていない。こちらが申しわけなく思ってしまうほどの萎縮と恐縮ぶりであった。

ふっとライトが落ちる。司会の演台にスポットが当たる。

喧騒が静まった。

「えー、ただいまより一之瀬、森内御両家の結婚披露宴をはじめさせていただきます。皆様におきましては、本日は御多忙の中を御出席くださりまして、まことにありがとうございます」

やけに軽薄そうな、芸人じみた司会が早口で進行をはじめ。

彼は新郎新婦の紹介をそこそこで切り上げて、

「では早速ではございますが、御来賓の方がたから順に御祝辞を賜りたいと存じます。まずは新郎側の御来賓を代表なされまして、現県知事であらせられます大河内辰雄様にお願いを——」

テレビのローカルニュースで見慣れた顔が、マイクの前へ立った。

「えー、ただいま御紹介にあずかりました、大河内と申します。ま、いまさら名乗る必要はないかもしれませんが、一応ね」

来賓席からどつと追従笑いが起きる。「いいぞ、先生！」と野次すら飛ぶ。

大河内知事が片手を挙げて応え、

「えー、譲さん、琴子さん、本日は御結婚まことにおめでとうございます。御両家の皆様方におかれましても心よりお祝いを申しあげます。と言ってもわたしや、新郎新婦とは今日が初対面でございます……」

ふたたび笑いが起こる。

その間にウエイターやウエイトレスたちが、各テーブルをまわつて、グラスに乾杯用のシャンパンを注いでいく。

手もとのグラスへモエ・エ・シャンドンの壇を傾けるウエイトレスを見あげ、

——どっかで見たウエイトレスだなあ。

と咲希は思った。

彼女がテーブルを離れ、数分してから思い出す。そうだ、綺星と書いてきららと読ませる新婦の披露宴で、司会に電報を渡していたウエイトレスだ。

制服のサイズが微妙に合っていないのがいつ見ても気になる。せめてスカート丈だけでも詰めてもらえばいいのに、と思っていると、

「——ではこれを持ちまして、幸せな御二方へのお祝いの言葉とさせていただきます。大河内様、ありがとうございます」

さて乾杯かな、と咲希はグラスを持ちなおした。

しかし司会は県知事がテーブルへ戻るのをたつぷりと見送ってから、満面の笑みで言いはなった。

「つづきましては、現在三期目の市長をお務めでございます増沢ますざわ様さま、どうぞマイクの前へお願いいたします！」

そして市長のスピーチが終わっても、県議会議長のスピーチが終

わっても、やはり乾杯の音頭は成されなかった。

三人、四人、五人と祝辞のリレーがつづいていく。

司会はもちろん、誰一人として「座ってください」とうながす者
はなかった。

注がれたシャンパンは、グラスの中ですつかりぬるくなっていた。
「まーあのですね、新郎新婦の御両名は一刻も早く子宝に恵まれる
よう、昼も夜も張りきっていただきたい。是非ともわが国の少子化
に歯止めをかけるべく、毎日毎晩励んでいただきたいと願う所存で
あります」

「讓くんが毎晩頑張れるかどうかは、ひとえに新婦の琴子さんの手
腕にかかってますからね。なにとぞ新婦が日々ハッスル、いえ努力
して、その女っぷりに磨きをかけられますことを切にお祈り——」

二十一世紀とは思えぬセクハラスピーチを聞き流し、退屈しきつ
た咲希と百合香は小声で雑談を交わしはじめた。

「そういえばこないだ貸してもらった少女漫画、面白いわ。恋愛メ
インでシリアスな漫画って読んだことなかったから、すごい新鮮。
意外にもハマっちゃった」

「意外にもって、あんたいままでどんな漫画読んだのよ」と百合
香。

「えーとね、武闘家同士がトーナメントで命を賭して闘ったり、ヤ

ンキー高校生が血で血を洗う抗争を繰りひろげて、完結までに二人、三人死ぬ感じの……」

わかった、もういい、と百合香が手を振って、

「そういや作者の永瀬風ながせなぎって地元こっちの生まれなのよ。だからあの漫画の舞台も、じつは市内のこのへんなの」

「え、やっぱり？」

咲希は声をあげた。

「どうりで背景の町並みに見覚えがあるなって思ってたのよね。とくに駅前通りとか、橋から見える景色とか」

「ヒロインたちが通ってる高校も、作者の出身校がモデルらしいわよ。登場するキャラクターのほとんどが元ネタありだって噂」

「えっ、じゃああの格好いい二階堂先輩にかいどうにも、まさかモデルがいるとか？」

「かもね。ちなみに作者の出身校は、かの聖北斗学院せいほくと」

「すごい、名門じゃない」

と咲希が身を乗りだすと同時に、司会がマイクの前へ戻って言った。

「それでは新郎新婦の新たな門出を祝して、乾杯をいたしたいと存じます。御発声は新郎の御父様であられる、一之瀬英様にお願いたします。皆様、どうぞお手もとのグラスをお上げください」

一之瀬英がピンスポットを浴びながら、どうも 胴間声を張りあげる。

「乾杯！」

かんぱーい、と唱和する野太い声があちこちから響いた。百合香が気の抜けきったシャンパンをすず啜って、

「せっかくのモエ・エ・シャンドンが」

と無念そうに呻き、さつそくおかわりをもらおうべくウエイターを呼ぶ。

「しかし乾杯を父親がやるってすごいね。普通そこは新郎上司とか恩師に頼むもんじゃないの？」

一緒に二杯目をもらいながら咲希が言った。

「まあこんなの序の口でしょ。見てよ、あの二人のお通夜みたいな顔」

百合香が小指でさりげなく新郎新婦を指す。

なるほど高砂の二人は、げんなり “を絵に描いたような表情で縮こまっていた。

「気の毒に」

「ね。政治家がらみの結婚式って多かれ少なかれ議員同士の社交場にされちゃうもんだけど、今回はなかなかひどいような予感がするわ」
果たして百合香の予言は当たった。

新郎新婦がお色直しで中座する間も、議員のスピーチは延々とつ

づいた。

新婦がトレーンの長いブルーのドレスに着替えて新郎と再登場したときは、さすがの司会も、

「新郎新婦を盛大な拍手で御迎えください」

と彼らを立てた。しかし二人が高砂へ着席するやいなや、

「つづきましては県会議員の鈴木様からお言葉を」

「つづいては市会議員の佐藤様、マイクの前へどうぞ」と例の調子へ戻ってしまった。

「ケーキ入刀も、キャンドルサービスもないのね」

咲希は呆れて言った。

「主役の二人は、最後まで雛人形ひなにんぎょうみたいにあそこで座ってるだけになりそう。新婦だって自分の披露宴でやりたいプランがたくさんあったでしょうに。新郎は自分の父親相手なんだから、もうちよつと強く出られなかったのかしら」

「無理でしょ」

フォアグラを優雅に切り分けながら百合香が応じる。

「見てよ、さつきから横目で新婦の顔をうかがっては、おどおどきよときよとしてるだけだもの。ワンマンな父親と優秀な兄貴の下で萎縮して育った、典型的なぼんくら次男坊って感じ」

辛辣しんらつだ。しかし的を射ている、と咲希は思った。

新郎はしきりに新婦に向かって目くばせしていた。「終わるまでの辛抱だから」、「今日だけだから」とでも言いたいのだろう。対する新婦は顔を強張らせ、彼のほうを見もしない。

——お高いフオアグラも平目のカルパッチョも、あの二人を眺めながらじゃ味がろくにわかんないわ。

咲希はがぶりと自棄気味にワインを呷り、

——おまけにこのスピーチ。
と顔をしかめた。

議員はすでに一巡したのか、マイクは「何々建築の取締役」、「どこそこ団体の代表」といった取り巻き連中の間を回されはじめていた。

どいつもこいつも駄洒落と下ネタ満載の下品な祝辞ばかりだ。いや、祝辞と呼ぶのもおぞましいような代物である。そうしてそれを聞いて笑っているのもまた、新郎側の来賓ばかりであった。

「これで一之瀬という名家と繋がりができたわけですから、新婦御家族様は今後、琴子さんに足を向けて寝られませんな。はっはっは」
「どこの馬の骨かもわからんものを、血筋も問わずに迎え入れてくれた譲くん、ならびに一之瀬先生の御厚情に報いるべく、日夜精進するように」

「えー、『女三界に家なし』、『嫁して三年、子なきは去れ』、『女の道

に背き、去らるときは一生の恥なり』——。男女同権などとかまびすしい世の中になって久しいですが、この三つは嫁の心得として不変のものであります。新婦の、えー……なんて読むんだ？ ああそう、ここ。琴子さんにおきましては、是非自分の立場をわきまえ、慎み深く、つねに譲くんのをとを三歩下がってつき従い——」

次いでどこかの会社の社員一同だという男性社員数人が、

「譲さん琴子さん、このたびはまことにおめでとうございます。今日から二人の結婚生活がスタートしますが、琴子さんを乗りこなしていく上で欠かせない運転免許証を発行いたします。以下、正しい取り扱い方と注意事項となります」

紙切れに書いた事項とやらを、声を揃えて読みあげはじめ。

「一つ、乗車前には念入りかつ丁寧な車体点検を、じっくりゆっくりにおこなってください。

二つ、乗りこむ際は車体にオイルが充分行きわたったかを確認し、ドアを一杯に開いて、やさしく深くキイを差し込んでください。

三つ、月に一度の赤信号のときは、焦らず無茶せずお待ちください。

四つ、深夜に大きな音をたてての暴走行為は近所迷惑です。エンジンの空ぶかし及び、クラクションは控えめに願います。

五つ、むやみやたらな前進だけでなく、たまにはバック走行もお

楽しみください……」

親父たちの爆笑と拍手、はたまた野次が会場に響きわたる。

咲希はもはや呆れ果てて声もなかった。

猿山の猿かなにかが騒いでいるのだと思うことにして、『帆立と伊勢海老のワイン蒸し』だの『和牛のポワレ、マデラソースのトリユフ添え』だのを胃に詰めこむ作業に集中する。かたわらの百合香はといえば、高価なワインをくいくいと水のように干していた。宴はさらに進行していった。

猥語わいごだらけの替え歌がなる者あり、いきなり脱ぎだして裸踊りをはじめた団体あり、はたまた咲希と百合香に、

「おねえちゃんたち、美人だなあ。こっち来てお酌しやくしてよ」

とちよつかいをかける親父ありと、ホール内は混沌こんとんを極めつつあった。下品な余興の合間にはさらにスピーチが挟まれた。そのほぼすべてが、

「一刻も早く子宝を」

「男児を産まない」と

の大合唱であった。果ては司会までもが、

「では琴子さんには来賓の皆様のご期待に応え、譲さんジュニアの顔が早く見れるよう夜な夜な切磋琢磨せつさたくましていただくということとで」

と締めくくるといふ始末だった。

いまや高砂の新婦は蒼白を通り越し、紙のように白い頬をしていった。

咲希はおそるおそる、背後に座る新婦の両親をうかがった。彼らは能面のごとき無表情で、席から微動だにしていなかった。

もう見てられない、と咲希が顔をそむけたとき、だいおんじょう大音声が会場の空気を裂いた。

「なんだ貴様、その顔は！」

一瞬にして場が静まりかえった。

ウエイトレスに抱きつかんばかりだったすいかん酔漢も、スピーチそっちのけで名刺を配りまくっていた議員秘書も、額にネクタイを巻いたお調子者も、目を剥いて動きを止めた。

声の主は一之瀬英であった。

仁王立ちになり、口をへの字に曲げて新婦をまっすぐ指さしている。

「さつきからなんだ、祝いの席だというのにそのぶつちやうつら仏頂面は！ 気に入らんのなら、いますぐ出て行け！ そもそもわたしはこの結婚には反対だったんだ！ 金を出してもらっておきながら、いまだきの娘は最低限の礼儀もわきまえんのか！」

会場は静まりかえっていた。

しわぶき一つなかった。

新婦は身動きもできない様子だった。新郎はなかば腰を浮かせた姿勢で、父と新妻を何度も見比べて狼狽するばかりだ。

息づまるような静寂が数秒流れる。

咲希の斜め向かいに座る男の喉仏が、ごくりと上下に動いた。

だが次の刹那、派手な音をたてて最後方の扉が開いた。

「はいドッキリ、大成功ー！」

頓狂な声をあげて駆けこんできた男は、手に『大成功！』と書かれたコミカルなデザインのプラカードを掲げていた。

男が高砂の横で足を止める。放心する新郎新婦にプラカードを見せつけると、彼は笑顔で司会とハイタッチを決めた。

戸惑いの空気の中、ようやくまばらな笑い声があがった。

司会がマイクを握り、

「以上、新郎のお父様より愉快的サプライズでした！ はい、大成功！ だまされた皆様、どうぞ拍手をお願いいたします！」

とピースサインを出す。

それに合わせ、とってつけたような笑いがあちこちから響いた。やつと事態を理解した人々に、苦笑と世辞笑いがゆっくり広がっていく。

「いやあ、さすが一之瀬先生、役者ですな」

「すっかりだまされましたよ。参った参った」

一之瀬英のまわりに群がる取り巻きたちが、口ぐちに見えすいたお追従を述べはじめる。わざとらしい、調子はずれの高笑いが数箇所から聞こえた。

「なんなの、この空気……」

啞然あぜんと咲希が呻く。

百合香が「しっ」と唇に指をあて、高砂を目で示した。

つられて咲希もそちらへ視線を流す。

おびえきって凝固こわごわしていた新婦の両目に、みるみる涙が溜まっていくのが見えた。唇がわななく。まぶたが痙攣けいれんする。

彼女はわっと泣きだし、席を蹴こって駆け出した。

ちようど料理のワゴンを運んできたウエイトレスが、高砂脇の扉を開けたところであった。例の制服サイズが合わないウエイトレスだ。

新婦がその脇をすり抜け、廊下へと出ていってしまふ。

「あ、えっ——」

新郎が間の抜けた声を発した。

しかしやはり父の顔いろをうかがうのが優先らしく、追っていいのかどうか決めかねている。片足だけを突きだした中途半端な姿勢で、たたらを踏んでいる。その間に新婦両親も娘のあとにつづいた。

「なにやってんのよ、早く追いかちなさいよ」

咲希は齒嚙みした。

その横でワインの残りを空けつつ、悠然と百合香がつぶやく。

「だから言ったじゃない、〃無理でしょ〃って。——ワンマンな父親と優秀な兄貴の下で萎縮して育った、典型的な次男坊クンだものね」

そうして三十分後、司会は汗を拭き拭き「披露宴の中止」を来賓一同に告げた。

新婦ならびに新婦両親が会場に戻ってくることは、最後までなかった。

3

中止を受けて咲希たちがロビーへおりてからも、なお混乱はつづいているようだった。

以前も見かけた赤い眼鏡フレームの女性が数人に囲まれて詰問きつもんされている。しかし彼女は意に介した様子もなく、へらへらと手を振ってかわっていた。

百合香が苦笑して、

「ああ、やっぱりプランナーは醍醐だいごさんだったか」

どうりで、と言いたげな口調だった。

眉根を寄せて咲希が訊きかえず。

「醍醐さんって？」

「あそこの眼鏡の女の人よ。青扇殿で雇ってるウェディングプランナー。そりやもう有名な人よ、ただし悪いほうの意味で」

との百合香の言葉を裏付けるように、プランナー本人の口から間延びした大声が洩れる。

「だってえ、料金の御支払いはお父様が全部なさるんでしょ？
どの業界でもスポンサーが最優先つてのが基本じゃないですかあ。
だったらプランだって、お父様の希望を一番に聞くのが当然っても
んですよねえ？」

胸の名札には派手なカラーペンで『醍醐リカ』の四文字が記されていた。べたべた貼られた何枚ものプリクラが、その名をさらに彩っている。

顔だけ見れば三十代後半だろう。しかし髪にはラベンダーピンクのメッシュが入り、^{じだ}耳朶にはずらりとピアスが並んでいた。おまけにネイルはラメやラインストーンだらけで、凶器と見まごうほどに長い。

「それに主任だって言ってたじゃないですかあ、『一之瀬様のご機嫌だけは損ねないように』って。だからリカ頑張ったんですけど？ い

まさらてのひらがえ掌返しとか困りますよ。自分の言ったことに、もうちよい責任持つてくれませんか？」

「いや醍醐くん、あのね……」

主任らしき男が冷や汗で額を光らせながら、「もつと声を抑えて」とジェスチャーで懇願している。

つまりはあの奇態なプランナーが新郎新婦を飛ばして、新郎父ごり押しごりのサプライズプランを受けてしまったということらしい。

なんて馬鹿な、と咲希は呆れた。いくら支払いが親がかりだと言ったって、主役である新婦の希望を無視した披露宴なんてあり得るものか。

「いったいなんなの、あの人」

「見てのとおり困った人なのよ」

咲希の言葉に、百合香は肩をすくめてみせた。

「あたしがこのバイトをはじめてからというもの、醍醐さんのいい評判へんぱんってまず聞いたことないわ。いわくミスが多い、高額なプランを押しつける、遅刻が多い、問い合わせの返事が遅い。おまけにいい歳して、最後は泣けば済むと思ってる……」

「それでよくくび鹹首くびにならないね」

「噂うわさだけど、お偉いさんがらみのコネがあるそうよ。何度も問題になっなってはいいるんだけど、結局そのコネとやらでうやむやになっなっちゃ

うみたい。でも本人は天職だと思ってるから辞める様子もないしで、全スタッフの頭痛の種だとか」

百合香は肩にかかる髪を払って、

「おまけに厄介やっかいなのは、彼女が大のサプライズ好きだったこと。フラッシュモブとか、桂かつらこきんじ小金治こぎんじばりの『感動の再会』とか、その手のプランをやたら組み込みたがるのよ。でもサプライズってハマれば最高に盛りあがる代わり、ハズしたら目も当てられない事態になるでしょう」

「ああ、わかる」

咲希はうなずいた。

「以前レストランでフラッシュモブ付きのプロポーズを執行したカップルに行き合ったことあるけど……彼女はドン引きしてるし、引いてる彼女に彼氏はショック受けちゃうしで、店内がどうしようもない空気に包まれたわ。おかげでこっちも料理の味がしなくて参っちゃった」

「そもそも日本人の気質に向いてないと思うのよね、サプライズって。とくに冠婚葬祭ともなれば、招待した上司や親戚の手前もあるし、下手な冒険はできないと思うのが普通でしょ」

「まあ、普通はね」

「でもそこを醍醐さんは『世界にたった一つのオンリーワンなプラ

ンでない！ 一生に一度のことなんだから、後悔しても知りませんよ！』なんて言ってごり押ししまくるらしいのよ。大半のカップルは当然断るんだけど、中には言いくるめられちゃう人や、押しに弱い人や、結婚に浮かれて思考能力を失った人も少なからずいてね

――

百合香が遠い目になった。

つられて咲希も遠い目になりかけたが、その前にはっと気づく。

「ねえ、そういえばこの前、先妻さんが乗りこんできた修羅場な披露宴があったわよね。もしかしてあれも」

「そう、醍醐さん担当の披露宴」

百合香が首肯した。

「と言ってもメインの首謀者は司会の女性だったみたいだけどね。でも面白がって先妻さんの席を用意しちゃったのは醍醐さん。ちなみにその前のナントカ綺星さんにドリフばりの白鳥ドレスを薦めたり、電報の確認を怠おぼろったのも醍醐さんらしいわよ」

「天災のような人ね」

「そうなのよ、まさにトラブルメイカー。台風の目。そこへ持ってきて彼女って、面倒くさい客ばかり担当したがる習性があるの。だからどうしても、あたしたちサクラとバッティングしがちなのよね」

やれやれ、と言いたげに百合香がかぶりを振る。

当の醍醐リカはといえば、いまだ主任相手に一步も退かぬ様子で言い争っていた。

遠目だが、両者の姿勢と語気からして主任のほうがあきらかに劣勢であるようだ。彼らの背後を、白茶けた顔の来賓たちが足早に通り過ぎていく。

「——ごめん。ちよっとお化粧直してくるわ」
げんなりして、咲希はきびすを返した。

青扇殿の化粧室は相変わらずきらびやかだった。ロココ調とでも言うのだろうか、全体に装飾過多で華美である。

金の飾り縁付きの鏡へ顔を寄せ、咲希はアイラインに滲みがないか確認しながら吐息をついた。

——憧れの式場なのに、ますますイメージが壊れちゃったな。

俗に言う「好きなことを仕事にすると長続きしない」現象とは何か。現実を思い知らされて、幻滅してしまう落ちか。

——とはいえせつかくはじめたバイトだから、まだ辞めたくはないけれど。

咲希は勢いよく両手で頬を叩いた。

気合を入れなおし、メイクのよれを修正にかかる。肉眼ではほぼ

わからない程度の崩れであるが、帰宅途中に史郎と会う可能性はゼロでないため気が抜けない。

ふと、咲希の手が止まった。

——誰か、いる？

気配、いや視線を感じる。気のせいだろうか。でも心なしか、空気が重い。

肩越しに振りかえってみた。

青扇殿の化粧室は扉が自動開閉式で、人が入っていないときでも閉まっている。しかし下部のスペースがわずかに空いているため、誰かがいれば足が見えるはずだ。

——いない……わよね。

鏡に向きなおりかけて、「あっ」と咲希は頭を両手で抱えた。

突如として襲ってきたのは、激しい耳鳴りだった。

眉を寄せ、咄嗟とっさに洗面台へ手を突く。きいいん、と響く耳鳴りが脳に突き刺さるようだ。胸がむかつく。かるい吐き気さえ覚える。

咲希がなかば無意識に腰を折った瞬間——。

背後の個室から、短い悲鳴が聞こえた。

咲希は身をすくませた。

女の声だ。

やはり誰かいるのか。だが振り向いて確認する勇氣はなかった。

そろそろと顔をあげ、鏡越しに後ろを確認する。

やはり誰もいない。

——でも、間違いなく気配がする。

耳鳴りはやまなかった。それどころかどんどんひどくなる。現実の音ではないはずなのに、耳を劈くような金属音が頭蓋に響きわたる。

気分が悪い。こめかみが疼くように痛みだす。その耳鳴りに混じって——。

息遣いが聞こえた。

せわしない、荒い息だ。かすかな音だが確かに聞こえる。

女だ、と直感した。さきほどの悲鳴と同じく、女の呼吸音だ。は

あ、はあ、はあはあはあ。追いつめるかのように、次第に早まっていく。はあ、はあはあはあはあ。粘って、鼓膜に貼りつく。

限界だった。

クラッチバッグを抱え、咲希は化粧室を飛びだした。

「ああ、あそこの化粧室、＼出る＼って言うわよね」

あっさりと百合香は咲希の訴えを肯定した。

「出る、って……」

「えーと、二十五年くらい前かな。奥の個室で手首を切った上に、

扉の荷物掛けで首を吊って自殺した花嫁さんがいたらしいの。政略結婚かなにかの被害者だったらいいわ。ただの首吊りじゃないあたり、どうしても結婚したくなかったっていう強い意志を感じるわよね」

「なにそれ、はじめて聞いた……」

咲希はその場にへたりこみそうになった。

あそこの化粧室には二度と行かない、と堅く心に誓う。いつも人氣がなくて使いやすいと重宝ちゆうほうしていたのだが、まさかそんないわくがあったとは。どうりでいつ行っても利用者がいないわけだ。

「……ねえ、その花嫁さんって、助からなかったの？」

「知らないけど、幽霊になったってことはそうなんじゃない？」

「やだあ、幽霊とか言わないでよおお」

咲希は怖気おぞけをふるった。

ともあれ化粧室を出た途端、耳鳴りが嘘のように止んだのは確かだ。吐き気も頭痛もきれいにおさまった。とても偶然とは思えなかった。

「やだもう、わたし靈感なんかはずなのに。二十歳になるまで視みなかった”ら、一生視みないって本みに書いてあったのに」

「そんなのあてになんないって。いいからもう帰りましよ、電車行っちゃうよ」

「うん、ありがと」

咲希は涙の溜まった目にハンカチをあてて、

「でもわたし、ロビーですこし休んでいくことにするわ。もうちょっと気を落ちつけないと無理。駅までの距離も歩けないかも」

「あれまあ」

百合香は苦笑した。

「じゃあわたしはお先に帰らせてもらうね。歩けるようになったら帰んなさいよ」

いとも淡白に離れていく相棒の背に、咲希は「うん、じゃあね」と手を振った。

ロビーのソファへ崩れるように腰をおろし、ため息とともに首こゝろを垂れる。

それからいったい何分うなだれていただろう。唐突なシャッター音とフラッシュの瞬きで、はっと咲希はわれに戻った。

顔をあげる。スーツ姿の押し出しのいい女性が、ごついカメラの前でポーズをとっているところであった。

歳のころは五十代なかばといったところだろうか。いかにも仕立ての良さそうなネイビーのスーツを着込み、豊満な胸もとに大粒のダイヤを光らせている。

だが何よりも彼女を華やかに見せているのは、衣服でも装飾品で

もなかった。自信に満ちたその笑顔であった。

「いいですよー、はい、素敵ですー」

カメラマンがフラッシュを焚きながら大声で煽る。

「もうちよつと体、左に傾けましょうか。そうそう、お庭の景色が入るように、角度付けてね。いいですよ、うん、さすが宝田^{たからだ}さん、撮影慣れしてるなあ」

——宝田？

咲希は耳をそばだてた。

確か青扇殿の創始者の姓が宝田であったはずだ。その後は長男が跡を継ぎ、さらに孫娘の婿^{むこ}が継いだ。残念ながら孫娘夫婦は離婚してしまっただが、その後は孫娘本人が代表取締役の座に着いたと記憶している。

——ということとは、あれが現社長の宝田^{みかこ}美香子。

思わず息をひそめる咲希のすぐ横へ、撮影を終えた美香子と取材陣らしきスタッフたちが腰をかけた。

「それでは失礼して、インタビューに入らせていただきます。えー、わが『月刊シテイスケープ』の宝田さんへの取材はすでに四回目となりますから、とっくに飽きておられるかもしれませんが……」

一同から笑い声があがる。

『月刊シテイスケープ』といえば、県内ではそこそこの有名なタウン

誌だ。咲希はスマートフォンをいじるふりをしながら、意識を隣へ集中させた。

「前回のインタビューも、やっぱり関谷せきやさんが担当してくださったのよね。飽きるどころか、慣れている方のほうがありがたいですわ」

ゆつたりと脚を組み、美香子は鷹揚おっように言う。

関谷と呼ばれたインタビュアーの女性が一礼し、ICレコーダをセットしてテーブルへ置いた。

「ではさっそくですが、質問をはじめてよろしいでしょうか。えー、こちら『青扇殿』といえば県内でトップクラスの人気を長年誇るブライダル会館ですよ。その社長でおられる宝田さんの結婚観というのを、本日はお訊きしてみたいのですが」

「結婚観……ですか」

美香子は頬に指をあてた。

左手の薬指にリングはなく、代わりにダイヤの指輪が中指に嵌はまっている。ネックレスよりもだいぶ小粒のダイヤだが、カットがいいのか天井の照明を浴びて虹色にきらめく。

「わたし自身の結婚観は、そうですね、『ケセラセラ』といったところでしょうか。人生なるようになる、としか言えません。なにしろわたしはほら、二度結婚して二度とも失敗しているでしょう。本来なら一番、ブライダル業界に向いていないはずの人間なんですから」

「またも一同がどっと笑った。」

美香子は皆の笑いがおさまるのを待って、

「そんなわたしがこの青扇殿を経営しつづける理由はただひとつ、娘です」

と言った。

「親馬鹿でお恥ずかしいですけど、娘をここで挙式させるのが夢なんです」

「ほう。ということは娘さんは、御結婚の御予定がおありで？」

関谷が身を乗りだす。

しかし美香子は苦笑して首を横に振った。

「そういうわけではないんですよ。あの子はまだ二十代前半ですし、焦らせる歳でもないと思っています。ただどうしてもこう、ね——。」

わたしのぶんまで幸福になってほしいと欲が出るといふか」

睫毛を伏せた。

「以前もお話ししましたとおり、わたしが最初に結婚したのは親が決めた相手でした。でもどうしても肌に合わず、家出同然に飛び出してしまいましたね。父には勘当だなんだと怒鳴られましたが、さ
いらい祖父が味方してくれたおかげで無事に離婚できました」

「そのお祖父さまとは、創設者の宝田幸造氏こうぞうでよろしいですか？」

インタビュアーの関谷が問う。

美香子は首肯して、

「ええ。祖父がこう言つてとりなしてくれたんです。『結婚の神様が微笑まなかつたようだから、しょうがない。そういうことも人生には間々ある』^まって」

「結婚の神様、ですか」

「祖父の口癖でしたのよ。とくに信心深いほうではありませんでしたが、自分なりの縁起かつぎをする人でしたね」

くすりと美香子は笑った。

「二度目の結婚もやはり親がらみでした。でもそのときは、自分でも納得した上で嫁いだつもりだったんですよ。結局は相手の横暴さや、女癖の悪さが目に付いてしまって駄目でしたが――。四度目の浮気が発覚したところで、娘を連れて逃げ出しました」

「さきほどおっしゃっていた娘さんですね」

「ええ。と言つても先妻さんが産んだ子ですから、血の繋がりはないんですけれど。でも五年も育てていると情が移りましてね、とても置いてはいけなかった」

「ご立派です」

関谷が相槌を打つ。美香子は手を振った。

「いえいえ、立派どころか、我慢のきかない我儘女^{わがまま}が歳をとつただけですわ。いまでもやっぱり我儘。商売に不向きなたちだというの

に我を通してばかりで、社員には迷惑のかけどおしです」

彼女はそこで背筋を伸ばして、

「ともあれ娘には、わたしがかなえられなかった幸せを掴んでもらいたいと願っていますの。お腹を痛めた子ではないからと、口さがない人たちがあれこれ言っているのは知っています。しかしわたしはあの子を実子同然、いえそれ以上に愛しています。娘が嫁ぐ晴れ姿を見る日までは、不向きな社長ながらも現役でいなくては」

と笑顔で言い切った。

そんな彼女の背後で、

『お母さんも、ここで挙げました。そして私も。』

のキャッチコピーで有名な青扇殿のポスターが陽光を弾いていた。

〈つづく〉